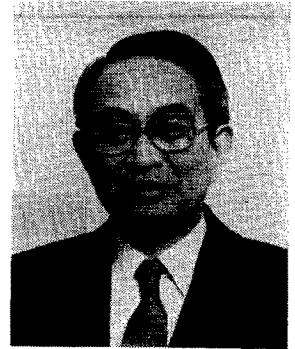


## 国際感覚

松下電器産業 技術顧問

唐津 一



一昨年レーガン大統領が日本に滞在していると  
きをねらって、私はジャパントイムスに寄書を書  
いたことがある。その主旨は、アメリカは日本の  
製品をもっと輸入すべきだ！

これはずいぶん反響があった。それはそうだろ  
う。今の今まで、日本は輸出のやりすぎだとい  
うのが定説になっていたからである。私の主張の理  
由は次のとおりである。貿易収支を合計でみる  
と、なるほど日本はずいぶん出超となっている。  
ところが、国民1人当たりいくら買っているかを計  
算してみると、むしろ逆のことになっている。日  
本人はアメリカの製品を年間204ドル買っている  
のに対して、アメリカ人は、155ドルしか買って  
いない。だから買いたらないのだ。考えてみると  
これは当然である。人口が2億人と1億人と2倍  
違うからだ。だから貿易収支をバランスさせよと  
なると、日本人はアメリカ人の2倍買わなくて  
は、つりあうところまでいくはずがない。そんな  
バカなことができるかと、まず前置きをした。

次にカラーテレビである。日本のメーカーはい  
ますべてアメリカに行きつづけている。ところが  
アメリカのメーカーは、シンガポールや台湾で  
つくっている。だからアメリカ市場では、アメリ  
カ製の日本のテレビと、海外製のアメリカのテレ  
ビが競争している。自動車もホンダ、ニッサン、  
トヨタと各社がアメリカでつくり出した。ところが  
フォードはメキシコに大工場を建てている。だ  
からそのうちにアメリカ市場ではアメリカ製の日  
本車と、海外製のアメリカ車が競争するようにな  
る。

これらを見ると、アメリカの雇用をふやすよ  
うに苦勞しているのは日本のメーカーで、雇用をへ  
らすようにしているのはアメリカのメーカーでは  
ないか、これを不公正といわないで、何が不公正  
といえるか。

カラスの鳴かない日があっても、貿易摩擦の記  
事のない日はないというのに、日本の新聞や識者  
は、いったい何を考えているのだろうかというのが  
私の気持である。

このようになっているのは、明らかに日本人の  
国際感覚の欠如からくるものである。日本のGN  
Pが世界の1割になったといわれるようになって  
久しいが、このことは、多かれ少なかれ、日本の  
企業がどこかで世界とかがわりをもつようにな  
ったということである。ところが、日本人の国際オ  
ンチぶりは、目をおおわしめるものがある。ちょ  
っと先方が甘い言葉で言い寄ると、たちまちウハ  
ウハであるし、パチンとやられるとシュンとな  
る。だから相手から見ると、アホではないかと思  
うだろう。

もともと大陸の国々は、お互いに殺りくの歴史  
である。なかには民族皆殺しといった物凄い話が  
いくらかもある。NHKの放送したシルクロード  
の話のなかにもずいぶんできた。また第二次大  
戦後でも、戦争をやらなかった国は、数えるくら  
いしかない。このことが先日あるテレビ局で放送  
されたら、ずいぶん投書がきたそうである。

だから過去のことを、とやかくいっていたら、

生きてはいけなくなる。そこでお互いに感情を殺し、はやる心をおさえて、笑顔でつき合っているのである。片手で握手して、足でけとばすくらいは、当たり前である。

香港返還のイギリスと中国とのあいだのかけひきを見るとよい。日本人の神経ではとても我慢できないようなやりとりが行なわれ、先日調印された。しかしこれでうまくいくと思ったら大間違いである。条約で後までそれが守られた例は実に珍しい。第二次大戦の終りに、ソ連が不可侵条約を一方的に破棄して満洲に侵入したのはまだ記憶に新しい。これが国際政治の現実なのである。

だからいま私はアメリカは貿易問題でずいぶん勝手だといったが、これが実は国際常識なのである。だから、こちらも堂々と反論すればよい。ところが不思議なことに、日本では身内から、そのうちにアメリカが、貿易の黒字対策を要求してくるに違いないと書きたてるのだから、まったくどうかしている。

ところで、日本のGNPはとうとう300兆円を越した。経済企画庁の予測では、あと10年すると、日本のGNPは世界の12%になるといっている。そのため、日本の企業は多少の差はあれ、ほとんどが、海外とかかわりをもつようになった。だから、好むと好まざるにかかわらず、日本の企業の国際化がすすむだろう。そのなかで、どのようにして、いま述べたような意味での国際感覚を日本人が身につけるか、大問題である。

これは、多少語学ができるとか海外での経験があるといったこととは違う。貿易のような数字でも、加工のしかたを変えると、まったく逆の結論でも引き出せる。このような多面的なものの見方をどのようにして身につけるかという根の深い課題である。

そのための訓練として、ORは最適なものと私は考えている。

ORはもともと、問題解決の学問であって、応用数学ではない。いくらうまく数式的な解が出て、それを現実の場に適用してうまくいかなければ、完全に落第である。それだけに、まず現実をいろいろな角度からつかみ、そして理解することが求められる。さきに日米貿易のバランスの問題を例にあげたが、さらにこれを突っ込んで調べてみると、日米での金のやりとりはうまくバランスがとれている。それはアメリカに対する日本からの資金の流れが大量にあって、これをつじつまが合っているのである。だから、日本のマスコミはほとんど書かないが、アメリカではむしろ、資本収支を入れると日米の経済関係については、うまくいっていると結論づけている意見が多いくらいである。つまり、アメリカの高金利をねらって、日本の金融機関は、アメリカに対して年間300億ドル以上の資金をもっていっているのである。これを入れると、金の動きとしては、日米間にそんなに深刻な問題はないのである。ところが、日本の新聞を見ているかぎり、アメリカは、日本に対して貿易黒字減らしを威だけだかに迫るだろう。またそれが当然のような印象を受けるだろう。昔からある盲人が象をなでてみたという話そのままである。われわれがもっている常識の多くは、新聞やテレビのようなマスコミの報道を下敷きにしてつくられているのだが、それは事実のほんの一部から見たものにすぎない。だから、これだけをもとに判断をしたら大変な間違いを犯すことになる。しかも、その中身にはひとつの流儀があるので、なおさら危ない。

この誤りを正すには、他の情報で補正するか、または自分独自の解析手段を使って、同じデータでも分析しなおしてやることである。そしてそれが国際化の時代にわれわれが生き抜くことのできるための必要条件である。